

特別支援学級における ICT を活用した授業実践の考察

—先進的な教師の取り組みから—

青木由紀子・福田 奏子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

特別支援学級におけるICTを活用した授業実践の考察[†]

—先進的な教師の取り組みから—

青木由紀子*・福田 奏子**
足利市立山辺中学校*
宇都宮大学共同教育学部**

GIGAスクール構想により、児童生徒一人一台のタブレット端末（以下、タブレット）が導入された。特別支援教育においては一人ひとりの教育的ニーズを補うため、ICTの活用必要性が示されている。そこで、本研究では公立中学校の特別支援学級での活用に着目し、GIGAスクール構想が始動したばかりの活用の実態や教師の意識を調査研究することとした。調査を実施することは、第一筆者の学習指導の参考にもなると考えた。はじめに、宇都宮市と上三川町、足利市の公立中学校特別支援学級担任にアンケート調査を実施し、その結果を精査した上で、先進的であると思われる教師の取り組みについて授業見学およびインタビュー調査をすることとした。「ICTの本来の活用とは何か」との観点から授業見学を行い、先進的な取り組みを目的の当たりにした。インタビュー調査では、特別支援教育の指導の在り方や教育現場の実態などを含めた考えや思いを聴取することができた。

キーワード：ICT、中学校の特別支援学級、アンケート調査、インタビュー調査

I はじめに

令和元（2019）年12月、GIGAスクール（Global and Innovation Gateway for ALL）実現推進本部が設置され、「誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びの実現」に向けた取り組みが始まった。筆者はこの取り組みが始まった当時、児童生徒一人一台の端末が導入されることや、特別支援教育におけるICT（Information and Communication Technology「情報通信技術」）の活用は、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに対応し、学習上又は生活上の困難を改善・克服させ指導の効果を高める重要な手段になると大いに期待していた。

第一筆者は前年度まで公立中学校特別支援学級級の障害クラスを3年間担任していた。実際、生徒達の中には他の教科の学習に対する意欲は低い一方で、技術の「情報に関する内容」という授業で、パソコンを使って検索をする課題については、意欲的に取り組む様子が見られる生徒もいた。また、不登校傾向の生徒が放課後等デイサービスには定期的に通うことができている理由について、保護者に尋ねたところ、「パソコンを使っての学習が楽しいようだ。」と聞いたこともあった。ICTの活用は生徒達の学習に対する興味関心、意欲を引き出せる手段になることは明らかであり、また、コロナ禍での臨時休校の際には、オンライン授業が学びの保障のひとつになると確信もした。2020年度には校内におけるICT環境の整備が急激に進む一方で、活用に関する校内研修の回数・時間・内容には課題もあり、どの教科で使用するか、ルールをどう決めるか、どのアプリを使用するか、トラブルに対応できるか、などの不安が残っていた。そこで、他校におけるICTの活用状況や、すでに先進的な授業を行っている学校、教師の実践方法について調査し研究したい

[†] Yukiko AOKI*, Kanako FUKUDA** : A Study of ICT-Enhanced Teaching Practice in Special Classes: From the Practices of Advanced Teachers

Keywords: ICT, special classes in junior high schools, questionnaires, interviews

* Yamabe Junior High School, Ashikaga

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

（連絡先：k-fukuda@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

と考えた。また、今回の主題は「特別支援学級におけるICTを活用した授業実践の研究」であるが、訪問校決定のためのアンケートにより得られた教師の意識等についてはもちろん、「私達教師が目指す姿」についても考察していく。

Ⅱ 研究の方法

1 アンケート調査

郵送による質問紙法を用いて、2021年5月8日～5月31日の期間に実施した。対象は、宇都宮市、上三川町、足利市の公立中学校特別支援学級担任とした。回答は2021年5月1日現在の状況とした。

2 授業見学

2021年6月22日～7月16日の期間に実施した。アンケート調査の回答内容を精査し5校の訪問校を決定した。対象の学校に依頼をし訪問、授業を見学するとともにビデオカメラによる記録をした。

3 インタビュー調査

授業見学後に約50分、5校の授業担当教師5名にインタビューを行い、ボイスレコーダーによって記録を行った。

Ⅲ 研究の結果と考察

1 アンケート調査の結果から

回答があった宇都宮市、上三川町、足利市の公立中学校31校において、GIGAスクール構想による生徒一人一台が使用するタブレットの導入は4月に100%であった。タブレットのOSは宇都宮市と足利市はChrome (Google)、上三川町ではWindows (Microsoft) であった。

特別支援学級の担任62名中、授業でタブレットを活用しているとの回答は51名(82%)と、ほぼ活用されていた。どの教科でも活用はあったが、特に総合学習がのべ39名と一番多く、次に自立活動がのべ26名、続いて社会がのべ23名であった。活用の機能については「ブラウザ/ネット検索/辞書」が各教科で顕著に多く見られた。具体的な活用方法(自由記述)の設問では、「ブラウザ/ネット検索/辞書」などの調べ学習で活用しているという回答が多数あった。授業見学をしたA中学校の作業学習では写真の検索、B中学校の国語では言葉の意味の検索、D中学校の生活単元学習ではホームページや場所の検索をしていた。また、活用についての苦心、悩みや不安(自由記述)の設問ではスキル不足を感じ

ているという回答が46名中31件あった。この点については、一人一台端末がスタートしてすぐの5月時点の調査であったことの影響も考えられる。

また、特別支援学級の担任62名中、授業でタブレットを活用していないとの回答は11名(18%)、その理由(選択)として「自分のスキル不足」という回答は5件あり、活用している教師も活用していない教師も、スキル不足を感じているという回答が一番多かった。

2 授業見学から

紙面の都合上、5校6授業のうちD中学校D教師の授業についてのみ記述する。

(1) 授業の概要(英語)

生徒3名(知的障害)、教師1名であった。授業はローマ字をひらがなに、ひらがなをローマ字にする学習で、知識を高めることを目的としていた。教師のホワイトボードによる説明と生徒がタブレットのテストとAIドリルで繰り返し練習(図1)、授業の最後にプリントで次の授業の予習をする流れで進められた(表1)。教師はホワイトボードに前時までに学んだローマ字やタブレットで行ったテストの問題を書いて復習をした。テストの復習は問題を間違えた生徒がホワイトボードに答えを書いていた。

(2) 生徒がタブレットを活用する様子

全体的にタブレットは使い慣れていて、ログインからClassroomを開く流れはスムーズだった。テストの始めにローマ字で自分の名前を書く際には、ローマ字の学習がまだ途中であるためか、文字入力に難しい生徒がいた。また、文字を大文字にしたりスペースを空けたりするなどの操作が難しい生徒もいたが、どちらの生徒も粘り強く取り組む様子が見られた。

* Classroom : Google Classroom クラス単位で学習内容を運営・管理するための無料ツール



図1 AIドリルに取り組んでいる様子

表1 英語の授業の流れ

時間	分	教師	生徒
休み時間	10		保管庫からタブレットを取り出す
9:45～9:47	2	英語であいさつ	英語で自己紹介とあいさつ
9:47～9:48	1	本時の授業の説明	教師に注目
9:48～9:56	8	ホワイトボードにローマ字を書き、前時までの復習をする	ホワイトボードに注目
9:56～9:57	1	机間巡視しながら、ログインとClassroomを開く指示	Classroomを開く
9:57～9:59	2	名前の書き方、大文字やスペースの入力の仕方を説明	ホワイトボードに注目
9:59～10:22	23	机間巡視しながら、ローマ字入力の仕方を教える 生徒の様子を見る ホワイトボードに問題を書く	タブレットを操作して名前を入力 問題を解く AIドリルに取り組む *図1参照
10:22～10:28	6	ホワイトボードで間違えた問題の確認	ホワイトボードに注目 ホワイトボードに答えを書く 正しい答えを言う
10:28～10:35	7	次の授業について伝える 机間巡視しながら、ローマ字の書き方を教え、丸付け	プリントに次の授業で学習するローマ字の練習
休み時間	10		次の授業の準備

※灰色箇所はタブレットを活用した時間（分）と活用内容

(3) 筆者が印象に残ったこと「教材の活用について」

タブレットでのテストが終わった生徒は送信し、すぐに採点されて、結果を知ることになるが、間違いによってショックを受けるような様子は見られなかった。採点結果による意欲の低下は無かったと考えられる。テストが終わると、AIドリルに進んで取り組み、その間に教師はテストが進まない他の生徒を教えることができた。このようなことから、教師は学習の習熟度による個別の対応ができたと考えられる。また、生徒が取り組む教材がホワイトボード、タブレット、プリントと変わるので、飽きのこない学習だったと考えられる。

3 インタビュー調査から

D中学校D教師へのインタビューの発言内容を一部要約して、記載する。

(1) D教師の取り組み

D教師は、ICTの活用について、「生徒に身に付けさせたい力であり、教師にとってはICTを使わずに授業の準備、指導を行うのは大変なこと。」と述べた。生徒に身に付けさせたい力について、「以前勤務していた特別支援学校の高等部では就職する時に、Word, Excel, PowerPointは基本的なところは使えますって言うと、どこの就職先でも『そうなのです

か!』って。就職先がかなり違ってきます。だから、生徒達には3年間で上手じゃなくてもいいから一応使えるようになろうねって教えていました。就職先から『ちょっとしたもの、掲示物作ってもらったりしてますよ。』なんて卒業生の話を聞くと、ああよかったなと思っています。」と述べていた。教師にとってのICTの活用については、「もう今となっては私にとっては無くてはならないというか、無いとすごく不安だなんて感じるものですね。その手段の一つとして当たり前に見えるようになってきたかなっていう。3年前だったらこんなにきっといろいろできなかつただろうものを、生徒にここを学ばせたいなってなった時に、じゃあどういった資料が準備できるかなとか、どういった提示の仕方ができるかなっていう中で、当たり前のように、こんなアプリはあるかなとかそういう視点でもう探しに行けるようになってきました。こういうことができれば、もっと私たちの仕事も軽減されるかなとか、そういう視点で考えられるようになってきたので、なくてはいけないもの。困るもの。」と述べていた。

(2) 活用を進めるために必要なこと

活用を進めるために必要なことについて質問すると、「お互いがこんなことをやっていますという、情報共有の場があるといい。」と回答した。この点につ

いてさらに、「こういう取り組みをしていますっていう、情報共有ができる場がすごく限られているというか、自分から見つけに行かないと無いじゃないですか。だから、こういうやり方をしていますよっていう場があると、あっそうなのだという気付きがあると思うのですよね。生徒にとっては視覚的な支援もそうだし、聴覚的なもの、いろいろな刺激があってそこから理解が進むという点では私たちも同じですよ。最近やっとClassroomのこととか、YouTubeでこういう時はこうやるみたいなのがやっと出てきたんですよ。最初の頃は全然Classroomについての説明なんかなくて、どうやって対処していけばいいかって思ったんです。」と述べていた。

(3) 直面する課題について

直面する課題について質問したところ、教材作りについて、「やっぱり作るのは紙の方が早いです。こういう問題を作るのも。たったあれだけの問題を作るのに、答えをいくつか、これでも正解、これでも正解を入れていかなきゃいけないので時間はかかります。それはみんな先生方一緒なんです。ただ、答え合わせの時に1回入れちゃえば一気に30人答え合わせをしてくれるから、そこはできちゃえばなんてことはないんだと思うんですけど。なんか始まったばかりのことなので。」と回答した。

4 まとめ

D教師の回答に見られた、タブレットの活用の利点を理解しながらも教材を一から作成しなくてはならないということは、他の教師も課題に感じていると考えられる。児童生徒一人一台のタブレットの導入は居住地域による格差のない公平な学びの環境になると言われているが、それ以前に教師の活用の方法や頻度から、すでに教師の学習指導の質に差が生じているのではないだろうか。どの教師も同じように扱える、全国共通の教科書のような教材の提供が必要になると考える。

GIGAスクール構想は、まだ始まったばかりであるため、多くの教師がICTのスキル不足を感じることは当然のことである。しかし、その短い時間の中においても、ICTの活用方法を身に付けていた教師達がいたのも事実である。では、この差は一体何だろうと考えた時、授業見学およびインタビュー調査をした5名の教師達にいくつか共通していることがあった。それは、意識の高さと前向きな姿勢、先

を見通す力である。インタビューで、ある教師は、「スキルを高めて自分が出来ないことには、子どもたちに使わせられないと思っている。」と、活用に対する意識を話していた。また、ある教師は、「GIGAスクールの有用性は絶対ある。」と断言し、ある教師は、「自分が発信すること。新しい事にチャレンジしよう、どんどんやってみよう。」という前向きな姿勢だった。そして、ある教師は、「これから絶対必要になる物だから。」と確信していた。

今日の社会は、生活のあらゆる場面でICTを活用することが当たり前になっている。Society5.0時代に生きる子どもたちにとって、タブレットは鉛筆やノートと並ぶ文房具になる。教科書がデジタル教科書に変わることは目前なのである。すでにD教師は、「無くてはならないもの。困るもの。」と、完全に自分の道具としていた。D教師の姿これこそが、これからの私達全ての教師のあるべき姿ではないだろうか。

IV おわりに

今、研究を終えて、これから学校現場に戻った暁には、このICTという素晴らしいものをすぐにも活用してみたいと感じている。この研究のおかげで意識を変えることができたと考える。あの生徒にはあんな風に、この生徒にはこんな使い方をして、あの授業ではこう活用してと、想像が膨らんでワクワクしている自分がある。昨年よりも、もっといい授業ができるだろうと期待している。そして、私の生徒達は学習がこんなにも楽しいと、自ら学ぶようになるであろう。

謝辞：本研究のアンケート調査にご協力いただいた先生方、お忙しい中、授業見学とインタビュー調査にご協力いただいた各学校の校長先生、先生方に心より感謝を申し上げます。

V 参考文献

- 1) 文部科学省 (2020) 教育の情報化に関する手引 (追補版)。
- 2) 寺嶋浩介・中川一史・村井万寿夫 (2017) 市内全校1人1台タブレット端末環境導入期における教師のICT利用に関する実態と印象—校種の違いに着目して—。教育メディア研究, 23 (2), 47-56。

令和4年4月1日 受理

A Study of ICT-Enhanced Teaching Practice in Special Classes: From the Practices of Advanced Teachers

Yukiko AOKI, Kanako FUKUDA